

母がやりたかった七つの事

作・村上 晴彦

登場人物

赤堀 西子（ゆうこ） 長女

白城 亥（がい） その弟・長男

赤堀 うさえ 西子の夫の妹

白城 辰馬（たつま） 父

白城 未（みつじ） 母

「人生に別れはつきもの」などと言うが、別れはいつも突然に訪れるもの。だから、その時その場で全部を受け止めるというのは難しい。だから、時間をかけてゆつくりと適応していくほかはないのかも知れない。

暗い中、一人の女性の姿が浮かび上がる（今回サスとかないから別途考える）。酉子である。

酉子

正直言つて、あの日のことはよく覚えていない。ただあたふたするばかり。焼けた鉄板の上で、素足のままタツプダンス踊るみたい。だから今度は、もう少し冷静に、大人のふるまいがしたい。せめて、靴下くらいは履いておきたい。

酉子の姿、消える。また別の場所に、今度は男性の姿が。これは、酉子の弟、亥である。

亥

今にして思うと、予感というか、虫の知らせがあつたのかもしれない。本当は、大した事なんだろう。なのに、妙に落ち着いていた。トーストの上に乗せたバターは、案に相違してすぐには溶けてくれなかった。けれどそれは、時間をかけてゆつくりとパンに染みこんでゆく。そんな気がする。

明るくなつてみると、そこはどこの家のリビングかダイニングだろうか、テーブルが一つに、イスが四脚。壁にはカレンダーがかかっている。イスの一つには風呂敷包みが置かれている。あと、写真なんか飾られていてもよい。黒いスーツを着た亥が一人、イスにかけてコーヒーを飲んでいる。そこへ、スマホを片手にこれまた黒のワンピースを着た酉子が慌てて突っ込んでくる。

酉子 スマホがあー！ 私のスマホがー……！！

亥 何だよ、朝からデカい声出して？

酉子 私のスマホ様が、お亡くなりになりました！（と、テーブルに一台のスマホを置く）

亥 はあ？

酉子 ご臨終ですー。だって、うんともすんとも言わないんだよ。電源ボタン押しても、画面真っ黒。それなのにあなたは何故にのうのうと座ってコーヒーなんぞをたしなんでいられるのよ!?

亥 デキる男の朝は、苦いコーヒーから始まると相場は決まっている。

酉子 自分だけ？ 私の分は!?

亥 だって姉さん、コーヒー飲まないだろう。

酉子 コーヒーが駄目なら、紅茶でも日本茶でも出せるだろうが！

亥 そんな暇があるなら、新聞の一つも読んだ方がましだね。姉さんは騒々し過ぎるんだよ。今日がどんな日かわかっているはずだろ。だったらもう少ししめやかに……（とコーヒーを口に運んだ方がいいが慌てて吹き出す）ぷっ！
姉さん！

酉子 何よ？

亥 人のコーヒーに勝手に砂糖入れるなよな！

酉子 あんたがカッコつけてブラックしか飲まないの知ってるこの私が、んな下らない事するわけないでしょ！

亥 じゃあ一体誰だよ？

酉子 どうせ父さんじゃないの？ そもそも私はね、朝からスマホ様のお世話でそれはそれはもう大変だったんだから。犯行に及ぶ動機も時間もない！ あー、こんなことになるなら、もっと大切にしていれば良かったー。電気

たくさん食べさせてあげれば良かった。冬は冷えるからニットのカバーにすればよかったー！ 毎日おフロに入れてあげれば良かったよおー！

亥 フロはいかんだろ。

酉子 それはものの例え！ しかし、今の私は去年とはひと味違うぞ。用意のいいことに、ほら、ポケットにちゃんとお数珠が！（とポケットから数珠を出して拝む）ちゃんとリサイクルに出します。どうか成仏してください。ナム
アミダブツ……。

亥 （指さす）それ、数珠じゃなくてストラップ。

酉子 よく似てるから間違えたー！ 「ビーズストラップは数珠に似ている」ていうのは誰の名言だったかしらね……。

と言いつつ、その場から駆け去ると、またすぐに本物の数珠を持って戻ってくる。その間に、机上に残された姉のスマホを手にしてみる亥。

酉子 全く、私をしたことが、こんな大事な日に、何を血迷っているのかしらね。冷静に冷静に……（手を合わせる）

亥 母さんは穏やかな人だったのに、誰に似たんだろね……？ やっぱ父さんの遺伝子かな……。

酉子 似てない！ 私は余裕で母9てん9・父0てん0000001くらいの知的美人です。

亥 計算が合わん。（スマホを手にして）あとこれ……。

酉子 何勝手に触ってんのよ！ これじゃない私のスマホ様！ いや、今となつてはその働きにふさわしい戒名が必要よね……。

亥 だからこれ、壊れてないって！ 画面の上から真っ黒い紙が貼つてあるだけじゃん（ぺら）ほら。

酉子 あ、あれ……？ なんでもまたそんなものが私のスマホに……、亥、あんたの仕業!?

亥 そんなことする必要がどこにある？ どうせまた父さんじゃないの？ 僕にはその心境が理解できないけどね。もつとも、タネに気付かない姉さんもうかと思うよ。

酉子 私だってね、お母さんのために、してあげられるだけのことはしてあげようと真剣に思つて、わざわざ前乗りして、準備だつてしてたんだからね！ ほら見なさいよこれ！（風呂敷包みを手にとり、どんと机の上に乗せる）

亥 何これ？

酉子 何つて、お供え物に決まつてるでしょ！ 母さんの好きだったお団子よ。

亥 イズ、イット、オール、お団子……？

酉子 もちろん！

亥 他は？

酉子 なつしんぐ！

亥 供え物だけじゃなくて、他にもいろいろあるだろ。お花とか、お線香とか、あと、意外に忘れがちなのがライター——なんだよね。

酉子 いいじゃない。人気店で油断すると売り切れるの！ 並んで買つてきたんだから！ あとは行く先々でなんとかなる。だから私は、パラメータをお供え物に全振りしたの！

亥 そうは言つてもだよ、世間の常識というか、長い歴史の中で積み上げられてきた風習というか、そういうものに則つてしめやかに手を合わせてあげるべきなんじゃないのか。姉さんときたら、いつだってどっか抜けてるんだから……。

酉子 (うるうる) 私だつてね一生懸命やつてるんだよ！ だつてきつと喜んでくれると思つて……。それなのにあんたはいつも文句ばかり……。

亥 それは姉さんがそっかしいからだろ！

声 朝っぱらから何を騒いどるんじゃない！

二人が見ると、そこに父・辰馬が立っている。なのだが、なぜかピクニックにでも行くかのようなラフな恰好をしてリュックを背負っている。

辰馬 じゃなくて、まーまー君たち、ケンカはよくない、よー。今日は大切な一日なんだから、家族仲良くねー。

亥 父さん……。

酉子 何よそのらしくない齒の浮いたような仲裁のセリフは!?

辰馬 いやー、ひつじさんなら、そんな風に言うんじゃないかなと思ひまして……。

酉子 母さんはそんな余計なこと言わない！ 私と亥が言い争いになつても、いつも黙つて微笑んでるだけだったもん！

亥 もこもこつかみどころがなくて、でも懷は深くて包容力のある人だった。

辰馬 たまには止めに入りたくなることもあつたんじゃないかなあ。酉子、口悪いし。

酉子 余計なお世話よ！ 大体ね、家族仲良くとかどの口が言つてんの!? 今日この日の重要性がわかつてんなら、父さんがもつと真面目にやんなさいよ。いい歳して娘のスマホにいたずらかますとか、それが父親のすること!?

亥 あと人のコーヒーにこっそり砂糖入れるのやめてくれよな！

辰馬 あーそうかそうか、そんなことがあったか……。じゃ、ほんとにやったんだー。まあそういうこともあるさ。
あはは。

酉子 笑い事じゃないでしょ！ほんとに心配したんだから！

辰馬 言つとくけど、それ、オレじゃないからね。

酉子 他に一体誰がそんなことするの!?

亥 いや、ちよつと待て。それはそれで問題だが、僕たち、何か根本的なことを見落としてないか。そもそも突っ込むところそこじゃないんじゃないだろうか。むしろ、何なんだよ父さんのその服装は!?

辰馬 え、頑張り過ぎたかなあ……。もうちよつと普段着で良かった？

酉子 そういうことじゃなくて、今日は母さんのためにこうして集まってるんだから、もうちよつと場所柄にふさわしい恰好つてもんがあるでしょ！遊園地かテーマパークにでも行くつもり!?

辰馬 そうそう、テーマパークって言ったじゃん。一家そろつて。

亥 はあ!?

辰馬 見て見て、ほらカレンダーにもちゃんと印ついてるでしょ。

と、辰馬がカレンダーの本番日付近の日曜を指さすと、そこには赤く花丸が書いてある。

酉子 花丸ー!?! あんた何考えてんの？

亥 いつ、誰がそんなこと言ったよ？テーマパークじゃなくてメモリアルパークの間違いだろ！

辰馬 だから、行こうって言ったのひつじさんだよ。前からみんなで行きたかったんだって。お弁当持って、レジャーシ

ートも持つて。あと、カメラも持つて。

酉子 言うわけないじゃない。だって、母さんはもういないでしょ。

辰馬 いるつて、ほら、そこに。

辰馬が指さすと、その先には母・未（ひつじ）がイスにかけて新聞を広げている。しかし、酉子と亥は一向に氣付かず。

亥 どこ!?

辰馬 そこだよそこ。わかんない？

亥 （酉子に）見えたか？

酉子 ううん、全然。

亥 （辰馬に）父さん！ 母さんが行つてからちようど一年ていうこの節目の日に、何不謹慎なこと言つてんのさ。

辰馬 そうなんだよねー、母さんが突然出ていった時は、もうどうしようかと思つてさ、途方に暮れたよ。だって、この歳になつて女房に行けるなんて恥ずかしいじゃない。それがさー、またひょっこり帰ってきたんだよ。めでたしめでたし。ね、ひつじさん？

未 ただいまー。…どうしようか随分悩んだけど、でも、結局帰つて来ちゃった。

辰馬 というわけで、準備できたなら行くよ。（風呂敷包みを見て）なあんだ、ちゃんとお弁当作つてあるんじゃないか。酉子、お前、案外氣が利くね。

酉子 それはお弁当というか、母さんのために買つてきた……。

亥 団子だつてさ。

辰馬 あーまあいいよ買つて来たもんでも。作るの大変だし、ひつじさんの好物だし。

未 ありがとう。

辰馬 それはそうと、本当にそんな堅苦しい動きづらそうな恰好でいいのかお前たち。遊ぶよー。並ぶよー。たまには走るよー。

亥 だ、大丈夫。これで結構。

辰馬 ま、いいんなら別にいいけどねー。

酉子 (亥に) どうしちやつたのよ父さんたら？ 寝ぼけてまだ夢でも見てるのかな……。

亥 いや、ショックのあまり、記憶に重篤な障害が発生してしまったのかも……。

酉子 それつて、認知症つてこと？ でも昨日まで普通だったし、そんな急にあそこまで訳わからなくなるもの？

亥 そうなんだけど、父さんだつて結構な歳なんだから、何が起こつても不思議はないのかもしれない。

酉子 じゃあどうすんのよ？

亥 とにかく、現状を、ありのままに、ビシッと伝えてみるしかないだろ。

酉子 ビシッと！ つて、誰が？

亥 そりや年長なんだから、ここは姉さんが一つ……。

酉子 やーよ、そんなの。言い出しつべだし、男同士、熱い魂の対話をあんたがしなさいつて！

と、二人がもめているところに、「ピンポン」とチャイムの音。これは、SEがなければ口で言つてもよい。連射してもよい。

亥 誰だよ今取り込み中だつてのに!?

辰馬 荷物かなあ……。借金の取り立てとかじゃないだろし……。

酉子 借金……?

うさ江 どうもー! ベル鳴らしても出ないし、カギ空いてたもんで、勝手に入ってきちゃいましたー!

と、言いながら、酉子の夫の妹・うさ江が勢いよく入ってくる。これまた、辰馬同様に、レジャーに行くかのような恰好をしている。

亥 うさ江さん、どうしてまたここに……?

うさ江 どうもー、亥くんお久しぶりー。もしかして兄貴の結婚式ぶり、いやそんなことないか。一年 前にも会ってるもんねー。

酉子 何であんたがここに来るのよ!?

うさ江 まあいいじゃないですかトリ子お姉さま。

酉子 トリ子じゃない酉子!

うさ江 お姉さまと違って、私のような常識人としては、こんな微妙な立場で、押しかけてよいものと熟慮しましたんですよ。なんです、仕事でどうしても本日参加できない兄になりかわりまして、こうして参上した次第でございますわ。

亥 だったら、何なんだよその恰好は?

うさ江 え、だつてテーマパークでしょ。

酉子 誰がそんなデタラメ言つたさ!?

辰馬 あー、それ、たぶんオレじゃないかなあ。

うさ江 実はね、私だつて気が進まなかつたんだけど、兄が「僕の代わりに顔だけでも出してくれ」つて頼むものだから、慣れない黒服に身を包んで、家を出たわけですよ。ほら、私つて慶事ならともかく、弔事には全く向いてない体質なもので、何といえますか、「見えちゃう」つていうか、「靈感が強い」つていうかそんなだから。で、いざ電車に乗ろうとしたその時、（胸のあたりに手を当て）このあたりに、ビビツとくる感覚があつて、我にかえると兄からメールが届いてましたの。

辰馬 それスマホのバイブだよ、たぶん。

うさ江 で、テーマパークに行くことになつたらしい、と言うから一旦家に戻つて、慌てて着替えてこうしてやってきた次第です。

酉子 そんなの真に受けてんじゃないわよ!

うさ江 え、違うんですか?

辰馬 いや違うない違うない。申午くんにメールしたの自分だから。彼は残念だけど、うさ江ちゃんだけでも来てくれて嬉しいよ。ひつじさんも喜んでると思う。

羊 ありがとう。

酉子 おかしいとは思わなかつたの!?

うさ江 おかしいもおかしくないも、その方が楽しいじゃないですか。

亥 ちよつと待てよ! 見えちゃうだの何だの言つてたけど、それホントかよ? 父さんはさ、母さんがここにいるつ

てさつきから言ってるんだけど、うさ江ちゃんそれ見えるか？

うさ江 そんな、いつも見えるってわけじゃないんだけど、ちよつと試してみます？（額に指を当てて念じる）あ、わかりましたー！（あさつての方を向いて）お久しぶりです、ひつじさん。

辰馬（未の方をさして）いや、ひつじさんこつち。

亥 見えてないのかよ!?

うさ江（慌てて向きを変えるが、でもちよつとズレている）あー私としたことがすみませんでした、ひつじさん。

未 私はここですよー。

酉子 もういいわよ！ あんたが出て来ると余計話がややこしくなるからすつこんでなさい！

うさ江 相変わらずつれないなあ、お姉様は。

酉子 うぜえ……。

亥 とにかく、このままじゃらちがあかない。かくなる上は、もう、僕がビシツと言ってやるほかないみたいだな！
…（辰馬に）父さん、あのさ……。

辰馬 なに？ もう準備いいのかい？

亥 父さん、落ち着いてよく聞いてくれ。母さんは、……母さんは、生きているよ。いつまでも、僕たちの、心の中に
ね……。

酉子 何その玉虫色発言は!? ビシツと言ってやるんじゃないの!?

辰馬 いや、いつまでもって、そんなことはないだろうよ。オレもひつじさんも、やっぱりいつかはお前たちを残して
逝ってしまうんだと思う。でも今はまだ、精一杯同じ時を生きていくんだ、命燃え尽きるまで。そうだろう？

未 ちよつと微妙だけど、辰馬さんの言う通りね。

酉子 ぼけてる割には返しがまともだー……。

亥 感心してる場合か！

酉子 あんたがはつきり言わないからでしょ！

亥 だったら姉さんが言えよな。

酉子 それはムリ。

亥 じゃどうすんだよ。このまま父さんに付き合ってほんとにテーマパーク行っちゃうつもりか？

酉子 あんたがしくったんだから、打開策くらい自分で考えたら？

亥 考えてるよ！ ……そ、そうだ！ タクシー！ タクシーを呼ぼう。適当に口裏合わせてタクシーに乗せて、墓前にたつて墓碑銘とかみたら、嫌でも現実を思い知るかも知れない。とにかく、電話してくる！ 姉さんは車が着くまで父さんに調子合わせて待たせといて！ よろしく！

うさ江 あ、じゃあ私も何かお手伝いを！

亥とうさ江、慌てて出て行く。

酉子 ちよつと待ちなさいよ！ 私一人置いてくつもり!?

辰馬 慌てて飛び出してたけど、どうしたんだい亥のやつ……？

酉子 あ、あのね、父さんももう高齢だし、電車の乗り継ぎとか厳しいだろうから、タクシーで行こうって、今、電話しに行ったの。

辰馬 そうかあ……。そんなに気を遣ってくれなくてもまだまだ現役なんだけど、せつかくのご厚意だから、甘えさ

せていただくことにしようかな。あと、ひつじさんもね。

酉子 そ、そうね……。母さんもいれて四人なら一台で……。

未 私は人数外だと思いますけどねー。

辰馬 まだまだ子どもだと思ってたけど、亥も立派な男になったもんだねえー。

と、そこへ、亥が戻ってきて、あと、うさ江も続いている。

亥 姉さん！ 車呼んで、もうじき家の前に着くって言うから、父さん連れてきて！

酉子 何言ってるの！ 亥も手伝ってよ。

亥 ほら、父さん、タクシー来るから、もう出るよ。ついてきて。

辰馬 大丈夫。そのくらい自分でいけるさ、先外出ていいよ。

亥 じゃ、早くしてくれよな。

酉子 どうすんのよ、父さんずっとあのままだったら、介護とか……。

亥 介護付き高齢者住宅とか入居させるほかないだろ。

酉子 費用はどうすんの？ マンションのローンもあるし、うちそんな余裕ないからね。

亥 こっちだって大した貯金もないよ。父さんの遺産だつて当てになりそうもないし。

うさ江 私も欲しいなあ、遺産。

酉子 権利もないくせにあんたはもうしゃべるな！ そう言えば、父さん、さっき借金がどうの言ってた気が

……。母さんの時は私が率先して面倒みたんだから、同居なんだし、今度はあんたが責任もつてよ。

亥 とにかく、今は目の前の困難を乗り切ることに専念しよう。

辰馬 どうした？ 行かなくていいのか。運転者さんうちの前で困ってたら気の毒だろう。

酉子 どうすんのよ、父さん一人にしているの？ まさかとは思うけど、自殺なんてしないよね？

うさ江 まあまあ。それはないと思いますよ。ここは二人きりにしてあげる場面ですから。（酉子の手をとる）さ、お姉さんも先に出ましょう。

あーだこーだ言いながら、とりあえず亥とうさ江、酉子の手を引いて出ていく。たぶんここらへんから音楽。

辰馬 …ひつじさん、もう行ってしまうのかい？

未 （メモ帳らしきものをポケットから取り出して開きつつ）はい。リストはあらかじめ埋まりましたしね、もう行かなくちや。でないと、あなただつて困るでしょう？

辰馬 介護付き高齢者住宅に入れるなら、それならそれでもいいけどね。あんまり遠いのはやだなー。

未 「娘のスマホにいたずらする」「息子のコーヒーに砂糖を入れる」「姉弟げんかをまーまーと言ってなだめる」「朝刊をゆつくりじっくり読む」「お団子をたらふく食べる」「家族揃ってテーマパークに行く」「プチ家出をする」あらかた叶いました。だから、もう大丈夫。

辰馬 やり残したことリスト、ひつじさんにしては随分お茶目だね、らしくないというか。

未 知らず知らずのうちに、私、良い妻、良い母を演じようとしていたのかもしれないですね。気にしないでください。それはやつぱり、辰馬さんのせいじゃありません。辰馬さんや、酉子、亥のために、私が望んでそうしたことなんです。だから、これで満足です。ありがとう辰馬さん。私、新居で待ってますから、

辰馬 そうだね、オレもじきに行く……。

亥の声 父さん！ 車着いたから、早く来て！

辰馬 はいはいわかりましたよー。

辰馬、未の見送る中、ゆつくりと出ていく。次第に溶暗。

幕